
ノア=クラスター

麻桐 都馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノアIIクラスタ

【Nコード】

N4540J

【作者名】

麻桐 都馬

【あらすじ】

誰が人で、誰がモノなのか。閉鎖されたトウキョウの片隅で生きる少年は思う。ノアと呼ばれる存在に至るため、己を賭けて闘う少女。自らの興味のためだけに生きる魔術師。この街で“生きてる”ものはいったいどれだけいるのか。

六年前の事件を境に、自らの隣にいた少女は消えた。街のモノは言う。そんな人間はいなかった、と。

真実を知りたいと願う少年、各務 恭哉は誓う。それを得るためなら、殺人鬼（自分）さえも認めて生きると。

斬るといふ概念を内包した狂気を手に、各務はノアの螺旋へ一步を踏み入れる。

虚数章 Re : / / (前書き)

大幅に加筆。四千字強。

熱。指先を包むねっとりとした感触に確かな熱量を感じ、その存在を確かめるように瞼を開く。死ねばそれは生前いかに優れた思考を持つモノも、ただの残骸へと成り下がるのだらう。実際、目の前に横たわるモノを見ても自分の思考は醒めたままであり、これといった感慨も沸き上がらない。

死んで、いるのだらう。生憎自分にはそういった判断を下せる知識は持ち得ていないため、もしかしたらこの壊れかけのモノは際どいところで残骸に成り下がってはいないのかもしれない。

酷く気分が悪い。視界に映る残骸と壊れかけのモノ。残骸の頬を撫でる。まだ、温い。きつとこれは残骸。首筋から流れる鮮血は既に水溜まりとも言える程の量にまで達し、凍える寒さに白い湯気をたてている。

もう一度、指先へ。熱。ねっとりとした質量。もう、戻らない。彼女はもう、笑わない。

左手に握っていた短剣が音を起ててアスファルトに転がり、朱に染まる。汚らわしいと、心から思う。同じ血液とは思えない程に、刃を濡らすものと辺りを流れるものが違って見える。

残骸を抱き抱える。

彼女はもう、戻らない。壊れてしまえば、それはただの残骸なのだ。元通りには戻らない。僕も、彼女も、壊れかけた殺人鬼も。

幼い頃は、とにかく血が嫌いだった。

着ている服に付けば母親に叱られるし、止まっただと思えば傷口がやけに熱く感じるし。何よりあの治りかけの、瘡蓋というものが大嫌いだった。

本当にちよつと、針が刺さったような傷からの出血でも嫌だったし、そういつたことのある日はその後一日中機嫌が悪かったのを今でも憶えている。

それから少しは成長して、小学校の高学年になる頃にはだいぶマシにはなっていたと思う。自分で怪我して勝手に機嫌を悪くするよくなことは殆んどなくなった。もともと大人しい性格だったからかその年頃にしては大人びた風だった為、少なくとも他人の前で嫌そうな顔をする事はなかった。

それでも。幾ら大人のような振る舞いを見せても。いまだに僕は血が嫌いだったし、それが他人の手によって、ましてその相手が幼馴染で怪我をさせといて悪びれもなく「ごめんごめん」なんて軽く言われた日には余計腹が立った。

そう、その日僕は怪我をしていた。

なんてことはない、ただの擦り傷。

気落ちして俯きながら帰路を辿る僕の隣を、結維が満面の笑みで自分の勇士を語って見せていた。

放課後の校門前。日も傾き始めた夕暮れの中。ちよつと待っててと言ったつきりどこかへ駆けて行き、なかなか現れない結維を僕は待っていた。季節は冬も真冬、吐く息真っ白の凍てつくような寒さの中、である。

そんな僕に対して彼女の取った行動は、格闘家顔負けの見事なドロップキック。ドタドタと駆けてくる足音にやつと来たかと振り返ろうとした瞬間の出来事だった。しかも彼女は僕を蹴り飛ばして置いて自分はいつたいたいどんなバランス感覚をしているのか、猫のように空中で身体を捻り見事着地と来たもんだから、腹が立つのも当然と言えよう。

「いやあ、あの技のキレ。見事に決まったね」

うんうんと腕を組みながら唸る結維を僕は恨みがましそうな顔で睨み付ける。

「そんなに怒らないでよ、きょーちゃん。ちよつと手を擦りむいた

くらいで」

「手だけじゃないよ！　いろんな所が痛いから！　おもに背中とか腰とか」

しかも寒空の中結維を待っていた為身体は冷え切っており、おかげで痛みも数倍強く感じられた。

背中を擦りながらとぼとぼ歩く僕の姿がさぞ滑稽だったのだろうか。彼女には良心というものがないのか面白そうに声を上げて笑っている。

僕はと言えばこの状態の彼女には何を言っても無駄だと経験上から知っていたので、必死で聞こえないフリをしながら急ぎ足で家路を進む。

最近、なにかと物騒な事件が起きているため早く帰って来なさいと、母から念を押されていたからである。

もちろん結維も同じようなことを言い含められているに違いないのに、公園に寄って行こうだとか駄菓子屋に寄ろうだとか、無駄に時間を掛けて帰ろうとしていた。きつと彼女にとって日の短い冬は寒さ以上に遊べる時間が少なく辛いものなのだろう。

そんな対照的な二人がお互いペースを合わせることなく黙々と少なくとも僕は）歩き続けていたのだ。自然と距離が開くのも道理である。いつの間にか結維の笑い声は消え、姿さえも日の暮れた街路の先に見えなくなっていた。

面倒な奴だ。

ずっと手首を押えて止血していた甲斐あつて出血の止まった手に目をやり、溜息をつく。

なんで怪我までさせられて、自分はいつの御守りをしなくてはいけないのだろうか。この世界はあまりに理不尽だ。

放って置くことなんて出来る筈もなく、さらに身体を縮みこませながら今まで歩いて来た道を遡り始める。草臥れた風の街灯が時たま点滅して驚かされた。どうも、怪我の痛みや諸々の精神攻撃で気が弱っているらしかった。

五分程歩いただろうか。いかに小学生の足とはいえ五分も歩けば地味に距離を稼げる。それだけに未だに結維の姿が見当たらないというのは、弱った僕には酷く不安に思えた。

話を聞かず黙々と歩き続ける僕に腹を立てて、人知れずどこかに遊びに行ったのかもしれない。前にもそんなことが幾度となくあった。

普段ならそこで諦めて、そのうち帰ってくるだろう結維を家で待つのだが（彼女はそうだった日には決まって腹いせをする為に僕の家に来るのだ）、今日ばかりはそうにもいかない。こんな物騒な時に結維一人残して帰ったとしたら大目玉は確実である。

仕方なくよく二人で行く駄菓子屋まで足を運び、店員のお婆ちゃんに結維が来ていないかを確認して次の場所へ。そうやって繰り返しすること十数か所。結維の行動範囲は異常に広いのだ。それでも二人で行く場所と言えば結構限定されてくる。もうあそこしかないと確信めいて訪れたのは酷く寂れた公園。

大きさこそ学校の校庭くらいあるというのに、この近辺は旧市街化が進んでいてかつては大勢の子どもが遊んでいたのが見る影もない。もつともこの時間に旧市街の公園で遊ぶような酔狂な子供は今時居ないのだが。

そんな公園の奥張った場所、入口から死角となるスペースが結維のお気に入りだった。

僕は直感的に結維がそこに居ることを確信して、ゆっくりと近付いていく。いかにも心配したように駆けて行くのは嫌だった。

そして、もう角を曲がれば行き止まり。何にもないくせにやけに広々とした空間に出るといふ所まで来て、不意に視界が歪んだ。

立ち眩みだろうか。随分長いこと走った為、あり得なくもない。しかし、頭のどこかで違つたと警鐘を鳴らし続ける自分が居た。

吐き気がする。そう、これは、自分の大嫌いなあの臭い。

口元を押さえながらゆっくりと足を踏み出し、恐る恐る目を見やる。

きつと、僕は吐いたのだろう。口の中に独特の酸味が広がり、口を押さえていた指の隙間から色んなものが零れ落ちる。

惨状は、意外と綺麗なものだった。

深紅の花弁を散らせた少女の姿。

無意識に、一步を踏み出していた。

流れ出した一枚の花弁が、踏み込まれた足に跳ねた。

血が嫌いだった。

ずっと、嫌いだった。

そんなこともどうでもいい。

今はただ、少女に触れたかった。

傍らまで近付いて膝を折る。

そつと、少女の身体を抱き寄せた。

むせるような臭いも、服に染み込む血も。

今はただ、モノに成り下がろうとしている彼女の身体を強く、抱き締めたかった。

気付いた時、僕はベツトの上だった。

最初に見た景色は見慣れない、あまりに真つ白な天井で暫く気付いたことにすら気付かなかった。

起き抜けにも意外と意識ははっきりとしていて、すべてが理解できた。彼女は、幼馴染の結維は殺された。

後に大人たちに聞いた話によると、僕も恐らく結維を殺した犯人に襲われたらしかった。

自分でもよく分からない。それでも僕はそうゆう人間に殺されて、そして助けられた。発見された時は確かに僕は死んでいて、それでも今は生きている。だから君は助かった命を大切にしなさいと偉そ

うな大人に何度も言われ、僕はただ頷くだけだった。

死んだなんてこと、どうでもいい。今は生きているのだから良いじゃないか。そう、言いたかった。けれど僕にはそんな事を言う事さえも億劫に思えて、ただ一言だけを医者に見せた。

「結維は、結維は何故助からなかったんですか？」

それだけが、聞いたかった。僕が生きている事なんてどうでもいい。

だから、医者の口から語られた言葉は想像以上に衝撃的だった。

「そんな子は知らないなあ。現場で見えたのは君と、バラバラになった犯人だけだったと聞いたけど。犯人をやったのはきつと特区の間じゃないかな。あれは酷かった」

そんな筈がない。確かに彼女はあそこで死んでいたのだ。

その後のことはあまり憶えていない。病室を訪ねる色んな人に聞いてみても皆口を揃えて知らないだけ。両親さえも、家族ぐるみで付き合いのあった結維の家族のことを知らないと言った。

それきり、僕が結維の名前を口にすることはなかった。事件のシヨックだろうと医者は両親に説明し、一応という事で精神病院にそのまま移ることになったからである。

僕はベットの上で毎日のようにそのことを考えていた。大人たちが言うように、彼女の存在は僕の頭が創り出した嘘だったのだろうか。考えても答えは出ない。それでも、それしかすることはなかった。

そうして暫くの月日が流れ、結維の事も口に出さなくなった僕の退院が決まった。

迎えに来た両親は嬉しそうに微笑みながら僕の手を引き、家路を辿る。

そうして次々と投げかけられる他愛ない話に適当な相槌を打っていた僕は、自分でも驚くほど急に足を止めた。見慣れた道。壊れかけの街灯。あの時走った、道。

あの公園に行ってみよう。不思議と恐怖はなかった。両親に少し

散歩してから帰ると告げると、二人は心配そうにしながら渋々と了承してくれた。きつと、病院で退屈そうにしていた僕の気持ちを察してくれたのだと思う。

特に急ぐ訳でもなく、あの時走ったのと全く同じ道をなぞり公園を目指す。

立ち入り禁止とかだったら大人しく帰ろうと考えていたが、その心配も杞憂だった。もともと旧市街成りかけの寂れた公園だ。事件当初は野次馬が集まっただろうが、それも過ぎればまた誰の声もしない場所に返るのは当然である。

それでもこの公園は近いうちに取り壊しが決まったようで、大きな目立つ看板が入り口脇に立てられていた。

それ以外にはこれといって柵などもなく、ごく普通に敷地内に入り奥へと向かう。入口からの死角、無駄に開けた空間。僕の、僕と結維の死んだ場所。

そのすぐ手前で僕は足を止めた。何故か、物凄く不安だった。ここを曲がれば、まだ結維の死体があるようなそんな錯覚。

意を決して前へ進んだ僕の目に映ったのは、あまりに変わり気のない景色だった。献花もなく、看板も何もなかった空間。

それもそうだろう。世間からすれば此処で見つかったのは僕と犯人だけであり、その僕はこうして生きていてその原因たる犯人に花が贈られる訳もない。

帰ろう。そう思って踵を返そうとした僕の視界に一つだけ、異質なものが掠めた。

なんだろうとそれに近づく。

ナイフだった。古めかしく、それでいて切れ味の鋭そうな刃物。素人目にも高価そうなものに見えて、僕は犯人の家族が置いたのだろうかと考え付いた所である部分に気付いた。

無銘。きつと、このナイフの銘なのだろう。しかしそんなことはどうでもよかった。問題はその溝にこびり付いた血痕。

僕は思わずナイフを手落とした。

犯人を殺したのは特区の人間だろうと医者は言っていた。しかし、こんな旧市街にそんな人間が偶然通りかかるだろうか。あんな風、人を殺すのだろうか。

そして、突然言葉が反芻される。

あんな風に

何故僕がそれを知っている。

バラバラに

医者が言っていたことだろう。

四肢をもがれて

違う違う違う。

僕の首筋に牙を突き立てて死んでいた

最初は、右腕だった。突然宙を舞った自分の腕に男は慌てふためき、目の前の僕を信じられなくても言うように凝視する。

続いて、左足。男が僕を蹴り飛ばそうとしたところを、カウンタ―気味に斬り飛ばす。

男はバランスを崩し、地面へと倒れこむ。そして、さらに攻め立てるように右足も斬り飛ばす。

男の表情は憶えていない。ただ、そいつは残った左腕で僕の足を掴み、這いずるようにして迫ってきた。未成熟な僕の身体はあがらうことなく引き倒され、男は僕に押し掛かる。首筋に僅かな痛み。

煩わしい。迷うことなどない。その手は容赦なく噛みつく猟奇殺人鬼の首を撥ねた。

死んでもなお握りしめ続けている最後の左腕を僕は斬り払い、首筋に噛みついたままの頭を投げ捨てる。

犯人を殺したのは、なんてことはない、僕だった。どうやったのかも今では思い出せない。それでも僕は確かに、その時その場で、笑っていたのだ。

僕は結維が死んだとき（そのとき）確かに、殺人鬼だった

彼女はもう、戻らない。壊れてしまえば、それはただの残骸なのだ。元通りには戻らない。僕も、彼女も、壊れかけた殺人鬼も。

第零章 銀系の乙女 1 (前書き)

ノアハククラスター、第零章。かなり遅筆ですが、三日に一回を目処に序盤は頑張ります。お付き合い頂ければ幸いです。

第零章 銀系の乙女 1

トウキョウと呼ばれる都市が閉鎖都市とされてもう十数年。物資の流通を除きすべての出入りが禁じられた監獄は、そこに生まれた者にとつてはなんの不便もなく、むしろ快適な生活が保障されていた。

閉鎖都市の西部のさらに片隅、一般区画と呼ばれるその街は確かに平和で、毎日を恙無く生活出来る程には整った環境が提供されている。反対に東部には閉じられた世界で発展した、まるでリアリティのない文明が発展していると教科書には記されていたが、その事実を確かめた人間は少ない。なにせこの一般区画の住人はそういった新興文明にまったく関与出来ない人間が集められているため、そもそも区画外に出ることを禁じられているのだ。

遠目に見える巨大な区画境界壁の周囲を嚴重な装備に身を包んだエリア警備の人間が徘徊していない場面を、少年ははまだ見たことがない。

まるで箱庭だな、と少年がつい呟いた一言を聞いて、隣で同じように区画境界壁を観察していた同級生が反応を示す。

「まあ否定はしないけどさ、そんなもんなんじゃん？ ここは確かに閉鎖都市って呼ばれてるけどさ、きつと外も変わらないんだよ」
見たことないけど、と同級生の篠前しのまえ 頼人らいとが面白そうに口を歪めた。

「ちよつと気になっただけだよ。隣のクラスの奴が魔術特区に行くことになっただけで聞いたからさ」

閉鎖都市東部の文明特区の一つ、魔術特区への移転が決まった生徒の顔を思い出す。

「ああ、あいつか。怖いよな、今までごく普通に付き合ってた奴が言葉一つで人殺せるような奴だったなんて」

言葉一つという部分には大きな語弊があったが、その他の意見に

は概ね同意出来たので少年はそれを糾すことをやめた。糾すだけの知識もない、というのが本当のところではあったが。

「さてと、そろそろ行かないと遅刻だ。急ごうぜ」

止まっていた足を動かし、目的地である教室に向けて歩き出す。

「待てよ、恭哉」

足早に渡り廊下を去る少年、各務かがみ 恭哉きよつやの後を追って頼人もその場を後にした。

高鳴る鼓動の音がいやにうるさい。そんな暇があれば足を動かせよと悪態をつくものの、結局のところ忙しく動く心臓に自分の足への命令権はなく、悪態はただの気休めでしかなかった。

そんなことは百も承知と自らの意志でアスファルトに覆われた地面を蹴りつけるかのように少女は駆け、周囲を見渡す。目の前には階段。追われて上に逃げるのは愚策でしかないと思うが、肉体も限界に近い。あえて裏をかくことで追跡者の目を欺けるかもしれないと、希望的観測に賭けて金属製の螺旋階段を駆け登る。

到着先は古びた鉄筋コンクリート造の屋上。幸いこの地域の建造物は高さが統一されているらしく、万が一追跡者がここまで来たとしても逃げ道はある。なるべく上ってきた階段から離れたところに腰を下ろし、僅かでも足を休めようとマッサージを試みる。

何故自分がこんな目に。万全の状態であればあんな追跡者に手間取ることはないのに、と唇を噛み締める。分かっている。自分が万全の状態ではないからこそあの追跡者は放たれたのだ。そんなことが分からない程に愚鈍ではない。それでも、だ。普段なら当たり前のように出来ていたことが出来ないとなると、それ相応の鬱憤は溜まるのだ。

追跡者、恐らく科学特区の人間と思われるその男は多分半機械、所謂サイボーグという奴だろう。不幸中の幸い、狭く入り組んだ路地に逃げ込んだことで追跡者はその性能を十分に発揮できていない。そう、早過ぎるのだ。直線的には無類の速さを誇っても、こう入り組んだ地形では逆にブレーキが効かないのだろうとアタリをつけてはいたが、こつとも上手く行くとは。

いくら撒けたと言っても長居は禁物だと少女は立ち上がり、軽く屈伸する。サイボーグ程ではないにしろかなりの速さで駆け回っていたのは事実であり、少女の肉体には大きすぎる負荷が掛かっていた。限界が近いからこそ今度こそ、確実に逃げ切らなければいけないと自身を鼓舞する。

そして、隣の屋上へと飛び移ろうと助走の距離を取った瞬間。家に車が突っ込んだような轟音、そしてそれに追隨するかのようには視界から消える目の前の屋上。倒壊していく。慌てて下が見える位置まで駆け寄ると、目に映ったのは見るも無惨な廃墟と化したもの。そしてそれに続くように響く轟音と崩れ落ちる建造物。

やられた。科学特区から離れたこの一般区画でここまで派手にことを起こすとは、完全に想定外の出来事だ。とにかく下に下りなければと身を翻すもそれすら遅い。相手は半機械のサイボーグ。一般人に成り下がり、逃げることにすら封じられた自分を相手に遅れを取る可能性など、皆無。

「鬼ごっこは終わりだ。白銀の姫君」 冷徹なる機械人形の乾いた声を前に、嫌な汗をはらんだ少女の銀髪が風に揺れた。

第零章 銀系の乙女 2 (前書き)

一回につきどのくらい投稿すればいいのか判断に困ります。短めですが、投稿しちやいます。

第零章 銀系の乙女 2

落ち着かない。見るものにとってあからさまにそう判断されるような様子で、男は応接用のいかにもといった具合の皮張りソファに腰掛けていた。

早く帰りたいという欲求と、こんな所から早く立ち去りたいという願望。結局同じことへと収束する心境と比例して、一挙一動に変化が顕れている。

自分はこんなにも素直な人間だっただろうか。そうやって思考の海に沈んでいくことは男にとって当たり前のことだったし、自分のような人間には極自然にこういった人格が現れる傾向はある。

いつたいどれだけの時間を浪費したのだろうか。一年と定められた期間はさらに三六五日に分割され、より身近に感じられるように単純化される。否、複雑化か。複雑な方が身近に感じられるというのは、どうしてだろう。三万日のうち一日を無駄にただけでこうも気が重いのだ。きつと秒刻みでその時間を表されればそれこそ死にたくなるかもしれない。

そう考えると、やはり正確な情報は身近に感じられるのかもしれない。一年も百年も正確には違いないのに、純度が違えばこうも体感が変わる。

することもなくなって壁に掛けられた時代遅れなアンティーク時計の秒針を目で追い始めて、針が三百回動いたところで扉が静かに開いた。

「お待たせして申し訳ない」

無精髭を蓄えた不潔そうな中年男性が向かいのソファに腰を下ろす。胡散臭いその男は中央のテーブルに置かれた安物の灰皿を引き寄せ、僅かにこちらの様子を伺い目を細めた。

「どうぞ。僕は吸いませんが気にはしません」

目の前の客人が吸わない人間ならば控えようといった思慮の観察

であることを見抜き、こちらから切り出す。こんなことで時間を割くのが億劫だった。

男はシャツの胸ポケットから潰れかけた煙草を取り出し、一本口に加えると不思議そうにズボンのポケットに手をつ込む。どうやらライターが見当たらないようで、どこにやったかなと小さく呟いた。

よろしければ、と男と同じようにポケットから一枚の小さなカードを取り出し、それが見えるように目の前に掲げた。男はすまないね、とその行為を促すように僅かに乗り出し、顔をこちらへ寄せる。距離自体関係はないのだが、それが当然とも言つような男の洗練された動きを前にそれを言うのも憚られ、気にせずカードを指で弾いた。

カードは寸分変わらず男のくわえた煙草の先端を掠め、僅かな音を起して発火する。燃え滓などは一切残らず、赤く火の燈つた煙草を媒介に挟み、胸いっぱい息を吸い込んだ男の口から煙が吐き出される。

「何度見ても思うのだが、誤って人に当たったりはしないのかね？」

「カード自体が当たることはあると思いますが、火が当たることはありませんね。カードを投げるのは一種のパフォーマンスですから。描かれた魔術式で魔力を炎という現象に変換しているだけで、座標は自分で設定します。カードはその設定された座標に現れた炎に触れて燃えるだけで、別にそれ自体から発火している訳ではありません。まあ、昔はその媒体が紙であったりしたため燃え滓で軽い火傷を負う、といったことはあつたようですが」

なるほどねえと頷く男にこのとおり、と新しく取り出したカードを宙に放り投げる。それと同時に空中に現れた小さな炎に接触することなく、カードはテーブルの上に落ちた。

「それで、問題の生徒は？」

パフォーマンスマスもこれくらいでいいだろうと判断し、今日わざわざこの一般区画にある教育機関を訪れた目的を済ませようと話題を切り替える。

魔術への適性を認知された生徒。その移転の付き添いが自分が今回この場所を訪れた理由だった。一般区画で魔術適性の認知された人間は基本的に魔術特区への移転が定められている。

同じように能力適性、科学適性とそれぞれの特区に因んだ適性を認められた人間はその特区への移転が定められている訳だが、今回はたまたま魔術適性を持つ人間だったということとでさして特別なことではない。強いて言えば、その人物の力が例年一般区画から認知される人間の標準値を大きく上回っているくらいか。

そんなことで今回、その生徒の移転付き添いを名目とした品定め
の役割が自分に回ってきた訳だった。

「それがですね、まだ来てないんですよ。というか、数日前から連絡が取れませんでした」

「それは、特別珍しいことなんですか？」

確かにこういった日に連絡が取れないのは珍しいかもしれないが、日頃からそういったことがあるのならそう珍しくはないのでは、というのが正直なところだった。

「はい、もう六年も前になりますか。ここ一般区画で殺人事件がありましたでしょうか。非常に猟奇的な」

「ああ、ありましたね。特区では珍しくもないですけど、完璧な安全・快適を謡っている一般区画での事件ということで、こちらでもだいぶ話題になりました。それがなにか？」

「それから子供達には一日に一回はなんらかの形で学校にアクセスすることが義務づけられています。まあこれは、事件を未然に防ぐということではなく、起こった後にかに迅速に動けるか、が目的なんですけど」

「僕たち特区の人間が関与してる場合、未然に防ぐというのはほぼ不可能でしょうから当然の処置ですね」

「ええ、ですから我々としても今回その、雲母クモというんですけどね。行方が分からなく非常に心配していた訳です。既にエリア警備が捜索をしているんですが、現状は芳しくない」

「分かりました、上には僕から報告しておきます。取りあえず特区に戻る前に僕も搜索してみますよ」

「助かります。それでは道案内を生徒にお願いしましょう。それでは、よろしくお願いします、九条さんくじょうさん」

男が煙草を灰皿で揉み消して立ち上がり、テーブル越しに右手を差し出す。僅かに躊躇ったが、同じように立ち上がって右手を差し出し握手を交わしてやると、男は安堵したように肩を撫で下ろし校門に生徒を回しておきますと告げ退室した。

第零章 銀系の乙女 3 (前書き)

短いですが、切りがいいので

第零章 銀系の乙女 3

「雨、か」

つい先程崩れ始めた空を見上げ、各務は呟く。

もう下校時刻だというのに一人空を見上げている各務を横目に、さも珍しそうに帰路に着く生徒たち。それもそのはず、最近はこの学校から魔術特区への転移者が出たということで授業終了後はすぐに下校するように教師に言い含められている。

それだけ一般区画、それも高校生から転移者が出ることは珍しいことだった。

しかし、それだけではない。六年前、こういった騒ぎに紛れて起こった事件の記憶がまだ新しいのだ。そういう無駄な可能性を、大人たちは掘り起こす。当の本人がこうも平然と日々を過ごしているというのに。

暫くして、あらかた生徒が下校したのを見計らったように男が一人現れた。

所詮大人たちは口だけなのだ。散々危険だから帰りなさいとっておいて、こうして生徒に面倒を押しつける。要するに保険なのだろう。なにかあったとき、私たちは注意していた、と。

「待たせたね、僕が魔術特区から派遣された九条。今回君には僕の道案内ということで同行して……もらうことになったんだ」

フレームレスの眼鏡を掛けた、線の細い成人男性。見るからにインテリといった風で、確かに魔術特区の人間らしかった。

「各務です」

「うん、各務くんね、よろしく。下の名前は？」

「恭哉です」

「もしかして、君って六年前の？」 九条が言いづらそうに頬を掻く。なるほどこの男は“知っている”人間らしく、それもかなり詳細に事の事情を知っているのだろう。そうでなければアレは世間で

は小学生が襲われ死亡としか公表されていない。

その表の情報しか知らない人間は大変だったねとか、無事でよかったねなど配慮ない言葉を掛けてくる。こうやって言い淀む人間は、裏の情報を知っている人間が大半だった。

「ああ、ご存じで？」

「そりゃ、その筋では有名だからね。エイヌ博士、知ってる？」

「……いいえ」

九条の口から出たエイヌという人名に覚えはない。

「表ではあまり有名じゃない、というか誰も知らない筈」

九条は空を見上げ、ああ、降ってきちゃったかあなどと呟く。

「それは、どういう？」

「うん、それは歩きながら話そうかな。僕も面倒事を背負い込んでるから、そっちもどうにかしないとイケない」

そういつて九条は側の傘立てから二本、目新しいものを二本取ると一本を差し出してきた。恐らく誰か他人の物だろうが、この男にはそういつた感情は希薄なのだろう。自分の効率を上げることだけを考え、その結果が世界に利潤をもたらす、質の悪い男。九条の第一印象は、そんなものだった。

後で返そうと自己弁護を立ててから傘を受け取り、若干勢いを増した雨脚の中に出る。

傘は意外と目新しく、後で返すとは言え罪悪感を覚えた。九条の方はどうやら外れだったようで、骨の折れた傘を忌々しげに見つめながらないよりはマシという妥協の末、降り注ぐ雨のなか各務と同じように進み出る。

しかし、案内といつてもどういつた所に行けばいいのか。九条の話からして何か目的らしきものはあるようだが、一般人である自分に話してくれるとは到底思えない。とりあえず人通りの多い繁華街にでも連れて行けばいいかと行き先に当たりを付け、駅に向かおうと九条に了解を求める。

「それでもいいけど、僕の目的は転移者・雲母さんの搜索なんだ。

彼女、そういうところ行くような娘？」

「え？ 雲母？ あいつなら旧市街にいるとは思いますが、そんな重要なこと話していいんですか？」

目的を聞くのは無理だろうという自分の予想を軽く破って、うん？ と首を傾げる九条に思わず目を見開く。

普通、各特区間の出入りは厳密に禁じられている。そういった中で今回のような許可が下りることは本当に極稀で、本来なら魔術師・九条の存在を隠蔽することも十分考えられるような事である。

その条例を抜けるために各特区にはその存在すら認知されないと噂、つまるどころ“いない人間”で構成された部隊を抱えていると噂されている程に各特区間の交流は至難を極めていた。そんな中飄々と現れ一般人に案内を依頼する九条は、ただでさえ各務は異常だと感じていたというのに、その矢先にこれである。

「そりゃあ良くはないけど、話さないと面倒だし効率悪いし。僕、早く帰りたいんだよ」

それで旧市街は？ と尋ねる九条に今向かおうとしていた駅とは正反対の方角を指差し、こっちですと先導を買って出る。

「転移者の護衛なんてね、よくあることなんだよ。今回は一般区画の高校生で、六年前の事件もあるもんだから上の連中は大騒ぎして見ただけだ。あの事件、全特区が絡んじやったからさ」

「それが、さっきのエイスっていう人に関係が？」

「そう、彼は所謂超天才。閉鎖都市史上初めての外からの来訪者。魔術、科学、能力のすべての特区でありとあらゆる知識を吸収した世界で一番危険だった男だよ」

九条は今までで一番楽しそうにエイスという人物のことを話し始め、時々ちゃんと聞いているか確かめるようにこちらへ視線を向けてくる。

「そのエイス博士が俺と関係あるんですか？」

「そう、やっぱり天才が考える事はよく分からない。何故一般区画に興味を示したのか、何故一般人の命を助けたのか」

九条のその言葉に心臓が跳ね上がる。何故ならそれが、六年前からのある一つの疑心を解く可能性を意味し、九条は恐らくそれを知っている。

それだけに、やりきれない。恐らく九条はその事について話す事はないだろう。Eイス博士という人物を語っただけでも、かなり危険な橋を渡る行為だ。それ以上を関係者とは言え、一般人である自分に話す事は永遠にない。

そして、九条なら、という淡い期待を抱いてしまおう自分が、そのやりきれなさを増長させている。

「やりきれなさそうだね」

自分の表情から察したのか、九条が楽しそうに笑みを浮かべながらこちらを向く。

「話してあげよう、と言いたいところだけど、残念ながら言えることも知っていることも、僕にはない。彼が何を考え、何がしたかったのか僕には見当もつかない。知っているのは、その結果君がこうして僕の隣で歩いている、という事と」

「事と、なんですか？」

「君は確かに、死んだという事だけだ」

雨音がやけにうるさい。もう目と鼻の先にまで近付いた旧市街への道が、やけに遠く感じられた。話しながらも、足は止めていない。歩くことでリズムを取り、平静を保とうとしていた。それだということに、もう限界が近い。この男は知っている。知っていて、義務でも規則でもなく、ただただ自分の愉悦の為にだけに話さない。

雨音がやけに遠い。意識は必要ない。本能が応える。右手が腰へ。六年前から持ち続けている自らの狂気に指が触れる。後は、解き放つだけ。目の前の男の口を割らせるには、十分すぎる。

「止めた方がいいよ、僕は魔術師だ。狂気には慣れてるから、呑まれない」

「それでも、出来る事はやらなくちゃいけない」

「せつかく貰ったものを無下にするのはいただけないなあ。せいぜ

「馬車馬のように生きないと」

「わずかに理性が戻ってきたのか、指先が宙を踊る。抜くべきか、やり過ごすべきか。心が迷う。」

「僕は、別に死んだ人の分まで生きるなんて惨いこと僕は言わないよ。なんせ君は一回死んでるしね。僕が言いたいのは、だからってイコールにはならないよってこと。血の匂いは、死んでも消えないから」

「何が言いたいのか、分かりません」

九条が言いたい事は分かった。しかし何を伝えたいのかが分からない。言葉と意思が無茶苦茶で、統合されていない。

「各務 恭哉くん、それを僕に言わせていいのかな？ まあ僕は言う気ないけど。あくまで目的は雲母さんの保護および魔術特区への護衛だから、戦闘は任務外だよ。ただね」

九条が言葉を切り、今まで九条へと向けていた視線を旧市街へと向け、わずかに微笑む。こっちが優先事項だと言わん気に何事もなかったかのように旧市街を背に立ちつくす、各務の横を通り抜け

「君が雲母さんを殺すというのなら、僕は応じる。任務だからね」

旧市街に鳴り響く轟音、次々と倒壊していく建物。それさえも各務にはどうでもよく思える。脳裏に浮かぶのは、今慌てて旧市街へと走る九条の背に狂気を突き立てるイメージ。そして、それ以上に鮮明な、雲母 皇月の血濡れたバラバラの死体だけだった。

第零章 銀系の乙女 4 (前書き)

アクセスが300を超えました。感謝感謝。至らぬ点ばかりの身、感想批評、いただけると嬉しいです。

第零章 銀系の乙女 4

各務 恭哉という人間は根本からして殺人鬼である。それは六年も前に確かめられているし、自分でも理解していた。

そして、理解していればそれを隠し生きていくことも大して難しくないという事実も、今までの六年間で立証されている。何の変哲もない、ただ過去に大きな事件に巻き込まれたというレッテルを貼られただけの平凡な高校生。世間からの各務への認識。

けれど本質は変わらない。制服の下に隠された狂気の具現とも言えるナイフは、きつと誰かの喉を切り裂くことを躊躇わない。

だから各務は走った。慣れていると言いつつ放った男を食い殺すほどの狂気を持って、真実に近づく為に。

旧市街の荒れた道を駆け抜け、九条が走り去った先を目指す。誰がやったのかは知らないが、道を挟んだ建物はあらかた破壊し尽くされていた為見失いはしない。

数分も走っただろうか。明らかに運動の得意そうでない九条は肩で息をしながら、一棟だけ残った建物の前で止まった。劣化した看板から読み取れるのは探偵事務所という当たり障りのない言葉だけで、とても九条が興味を抱くようなものには見えない。

「九条！」

数メートルの距離を置いた所で足を止め、いまだに息の整わない九条を睨みつける。

「九条さんから格下げか。まあいいか、どうでもいいし」

「六年前の事件について、知っていることを教えてもらう」

「知ってるも何も、子供が一人猟奇殺人者に殺され、それをエイズ博士が助けた。それだけのことだろう？」

「違う、あそこにはもう一人居た筈だ」

ゆっくりと制服を捲り上げ、そこに隠されていたナイフに手を掛ける。

「いやいや。記録上、あの場に居たのは君だけだよ。僕はそれしか知らない」

「エイズ博士は……どこにいる？」

「さあね、一研究者の僕には分かりかねる。知りたいなら、他を当たってくれ」

九条は躊躇いなく各務に背を向け、僕には僕の仕事があるからと言いついて歩き始める。

抜こうか、抜くまいか。各務は逡巡する。九条は本当に何も知らない可能性が高い。今までの思わせぶりな態度はむしろ、自分から引き出せるだけの情報を引き出す為の演技だと思えなくもない。

どうするか。あの男の性格からして、一度興味を持った事をそのままにするとは思えない。それでも、本格的に腰を上げるとすれば魔術特区に帰還してからだろう。そうなってしまうえば、一般人である自分にはどうすることも出来ない。

再びコンタクトを取ってくるという事もあり得るが、そんな待ちの姿勢ですべてを知れるとは到底考えられない。

そうこう考えている内にも九条は、やっと得た手掛かりは遠ざかっていく。やるしかない。何もせず後悔するのだけは御免だ。

各務は決心して、制服の下に装備されたホルダーからナイフを引き抜く。そして、まるで根が張ったかのように凝り固まった足を無理矢理動かす、九条を追うため駆け出した。そう、たしかに駆け出した筈だった。

轟音とともに探偵事務所の壁と看板をぶち破った何か。それを確かめようと向けた視線は次の瞬間には空を仰ぎ、再び探偵事務所へ。先程までと違うのは、壁がぶち抜かれたせいで今にも倒壊しようとする事務所と人影。

「目撃者の生存を確認。任務に準じて、目撃者は抹殺する」

やばい、と頭で分かっただけではいても、身体が動かない。そればかりか、一体自分に何が起こったのかさえも理解できない。分かるのは、身体中に走る鈍い痛みと、もう手掛かりはどこかに行ってしまった

だろうという絶望的な事実だけ。

わずかに定まってきた焦点で必死に何者かの姿を捉えようとして、各務は愕然とした。

振り上げられた腕らしきもの。

それを覆う金属質の物体。

そしてギアの噛み合うような、明らかな機械音。

半機械人間、サイボーグ。科学特区の主戦力である思考する兵器。およそこんな一般区画の旧市街にいるような種類の人間ではない。

しかし、そんなことを考えている場合ではない。あの、ごく普通に振り下ろされるような腕ですら、こんな一般人虫を潰すかの如く捻り潰せるだけの力があるはずである。

各務は歯を食いしばり、転がるようにその場を離れる。

一瞬の差だった。どうやら自分は最初にサイボーグの男が壁をぶち破って出てきた時点で吹き飛ばされ、向かいの建物に叩きつけられたようだった。その証拠について先程まで自分が力なくもたれていた場所は木端微塵に粉碎され、その破片の幾つかが傷ついた身体に新しい傷を生み出していた。

「理解しかねるよ、本当に。厄日だな、こりゃ」

多少は自由の利くようになった身体を動かし、側の壁を頼りに立ち上がる。

正直、八方ふさがりだった。普段でさえサイボーグから逃げ切れる可能性は零に等しいというのに、今とあつては指一本動かすのに激痛が走るような状態である。どう考えても、生き残るのは無理だ。「サイボーグ、ひとつ教えてやる。お前のことならさっきまで居た九条っていう魔術師も見てたぜ」

一か八か。一般人と魔術師であれば、魔術師を優先するかもしれない。そんな甘い希望といけ好かない男への嫌がらせを込めて、各務は言い放つ。

「では、君を抹殺した後にその者を追うとしよう」

本格的に、望みは断ち切られた。やはり相手はプロであり、そん

な子供だましの通用するような相手ではなかった。

サイボーグが一步、緩慢とした動作で足を踏み出す。

どうしようもない。そんな当たり前のことを突き付けるかの如く、余裕の表情で各務へと迫る。

無意識に身体は後ずさるが、ただそれだけ。行方を遮る壁もないというのに、確実に追い詰められ数秒後には殺される。

所詮殺人鬼だって人間だ。なにか手違いがあったからと言っても、子供に殺される程に脆いものが機械相手にやりあえる筈はない。

それでも、何もせずに死ぬのは御免だった。

相手が一般人だと思つて油断しているのか、ひどく緩慢に振り下るされようとする機械腕に向けて、吹き飛ばされても手放しはしなかったナイフを振りかぶる。

手応えはあまりになかった。そう、まるでプリンにスプーンを突き刺すかのように、軟い。外したと頭では思つた。相手の腕は装甲に覆われているし、斬れるとも思つてはいない。せめて弾くことぐらいしていたとしても、この手応えはあり得ない。

それでも、相手の動きが一瞬止まったのは僥倖だった。何を確認するわけもなく、今出来る最速の動きで身体を反転し、距離を置く。そして次の攻撃に備え向き合った時、異常を理解した。

サイボーグの腕があつた場所は空しくなく、そこから覗く複雑な機械部品から流れ落ちるオイルか何か。

流れ落ちていたものが血ではなく、オイルだったからかもしれない。事理解に数瞬の時間を要した。

「概念武装……貴様も魔術師か!？」

サイボーグから発せられる、初めての人間らしい感情を乗せた言葉。

「いや、俺は単なる一般人だ」

魔術師だろうがなんだろうが関係ない。今は目の前のサイボーグが予想外の事態に動揺し、そして自分のナイフは相手を傷つけられる。その事実だけで十分だ。

再びナイフを握る手に力を込め、正眼に構える。なんの小細工もない。ただただ、相手より先にその切先を突き立てる。それだけに全身の神経を集中させた。

『、目標が逃走した。逃走先は……上だ！』

一瞬の間。今までこちらの一拳一動を観察していたサイボーグが、装備していた通信機から流れた声に気を逸らした。逃す訳にはいかない。

ありつたけの力を込めて愚直に突進する。遅れて迎撃に移る残った機械腕をスライディングですり抜け、懐に潜った所で足を突っ張る。勢いを殺さず、上体を浮かす。最後のチャンス。狙うべき場所は殺人鬼としての本質が教えてくれる。

遅延する事象。流れる景色。たとえ人を外れた機械人形だろうと指示を出すのは脳。ぎりぎり殺傷範囲に食い込むのは首。ならば、その首を切り落とす。

一種の賭けだった。先程機械腕を切断出来たからと言って今度も出来るとは限らない。それでも、出来たとすればそれは、難なく装甲を破り、筋肉を裂き、骨を断つ。出来なければ死。ありつたけの力を込めてナイフを振りぬいた直後、その重圧から解放され意識が飛んだ。成功か、失敗か。それを考える間もなく瞳は光を失い脱力する。

しかしそれもわずかな時間だった。ねっとり絡みつくような熱源。顔中に広がる温もり。いつか嗅いだ懐かしい匂い。

たとえサイボーグでも、脳には血液が必要だったのだろう。引き裂かれた首から噴水のように噴出した鮮血は雨のように各務に降り注いだ。

取り戻した意識に飛び込んできた、ずり落ちるようにして地面へと吸い込まれる頭。迸る血潮。やはり自分は殺人鬼だ。人を殺したというのに、涙さえ流れない。吐き気さえ起らない。思考は冷静だった。今もなお目の前に立つサイボーグだったモノに向けて呼びかける、通信機の声。内容も聞き取れる。受け止める。ただそれを

繰り返すだけの野太い声。

ふと、空が見たいと思った。あのときのように、雨はこの凄惨な場を洗い流してくれるのだろうか。

そして見上げた空に映ったのは人影だった。厚い雲に遮られこの場を照らすことのない陽の光。そんな薄闇のなかに煌く銀。それを茫然と眺めながら、思う。雨の代わりに降り注いだこの少女は、この血濡れた手を洗い流してくれるのか　と。

フラグメント・オーヴァー（前書き）

九条・雲母の幕間みたいなのです。

フラグメント：オーヴァー

魔術師とは、とても稀有な存在なんだと、昔は思っていた。

それは九条という一人の人間が一般区画で生まれ育ち、そしてその才能を開花させたから。魔術と超能力の類は似ているようで、全く異なる。生まれ持った才のみがすべてである天然物と、すべての人間が扱うべくして作られた人工物。

もちろんその内容に関しては才能というものが大きく影響する場合もあるが、扱うだけなら誰でも扱える。その知識さえあれば。

誰にも扱える、ということはある意味で一番難しいことである。要するに、それだけ工程が複雑に入り組み、擦れ、転じて全人に不平等という結末を齎す。これさえ行えば必ず行使出来るというこれさえを、実際にこなせる人間は少ない。

そして、魔術特区の人間と九条の違い。

これさえ、が与えられるか否や

九条はただの一人で、その類稀なる才能をもって独自の魔術体系を創り上げた。魔術特区には存在しない、新たな体系。それは甘美な言葉で九条を誘った。魔術特区への転移は拒むべくもない。

あの場所には、いつたいどれほどの未知が待っているのか。

結果として、それは期待はずれもいいところだった。何故ならそこに、九条の知らないモノはなかったのだから。

他人の組み上げた工程など、無意味だった。そもそもいかに特区の魔術に多様な種類があったとしても、九条の魔術とは世界が違うのだ。色々な国がある一つの共通言語を定めて相互認識しているように成り立っている特区の魔術。それにそもそも言葉の存在しない九条の魔術は加わりようも、理解のしようもない。

九条が求めたのは自分の知らない結果。その結果に自分の魔術でいかにして到達するか、という行為。

たとえばそれは、隣の間がライタを使って火を着ける。九条に

とつて、ライタはどうでもいい。持っていない物は使おうがないのだから。関心を持つのは火を着けるといふ事。いかにして自分が火を着けるかといふこと。

知らない結果がないのならば、ここに来た意味もない。一人で籠つて、未知なる結果を探せばいいだけのこと。

そしてそれを、魔術特区という一個の世界は容認しなかった。ただそれだけのこと。

なんて、つまらない。

雨に濡れたコンクリートの道路を歩きながら、九条はぼやく。

正直言つて、自分以来初めて独自に魔術体系を生み出したという人物に興味はあつた。だからこそこんな面倒な仕事を渋々引き受けて、こんな辺鄙な区画まで出向いたのだ。

それがどうしたことだろう。目的の人間は行方をくらまし、代わりにとつておきに面白そうな事を見つけてしまった。だというのに自分は見つかるかも定かじやない奴を捜さなければならぬ。こんなにつまらないことが他にあらうか。

幸いと言つてはなんだが、見つかるかも定かじやない、という事項は先程解消されていた。たまたま準備していた探査用の魔術が功を成したといつたところだろうか。準備していなければ恐らく、この場で魔術を組むなんてことはせずそのまま諦めていただろう。

つい数分前まで後方から聞こえていた激しい音も今ではすっかり鳴りやみ、それを気にながら九条は目の前の建物を見上げる。

地上四階、地下一階。既に朽ちかけているようで、その役目を果たさなくなつた自動ドアをこじ開けて中に足を踏み入れる。

この区域が旧市街となつた時から誰も訪れていないのか、床には埃が被つており、歩くと足跡が残る。

もとは事務所か何かだったのか、正面にはカウンターが。その左手に自販機、右手に階段とエレベーターがあつた。

念のためエレベーターのスイッチに触れてみるが、案の定反応は無く九条は肩を落とす。自他共に認める運動音痴の九条は、階段を上るのでさえ億劫だった。一フロアならまだしも自分はこの建物の屋上まで行かなければいけないという事実には若干嫌気が差し、開いたままの自動ドアを見つめて僅かに逡巡。溜息と共に一段目へ足を掛けた。

戻りたくても、戻れない。九条の探査用魔術が捉えたのは目的の雲母だけではなく、科学特区の機甲兵師も確認していた。このままふらふらと来た道を辿ってバツタリ遭遇なんかすれば、機密保持やらなんやらで襲われかねない。

必死の思いで辿りついた屋上の重たいドアを押し開け、とりあえず周囲を見渡す。

片隅に置かれたコンテナのような物が雲母の住処らしく、既に人の気配が希薄だった下の事務所とは違って生活感のようなものを感じた。

その次に見たのは、先程探査した際に機甲兵師がいたと思われる場所。目的を果たしたのかどうか知らないが、とりあえずさっさとご帰宅願いたいというのが九条の心境。

得てしてこういう願いは予定調和的に叶わない訳だが、それでも護法結界なんかを張るつもりは毛頭ない。相手のレベルは分からないうが、万が一対魔術兵装だった場合は逆に一発で見つかってしまう。仮にそうだったとすれば、相手の目標はほぼ間違いない自分か雲母であり、どちらがそうだったとしても逃げ道はないという状況になっってしまう訳だが。

一応周囲を警戒しながらコンテナに近付き、扉のような部分をノックする。意外と頑丈な造りらしく、叩いた手の方が痛かった。

そして、間を置かずを開いた扉から覗いたのはまだ幼げの残る少女の顔だった。

「どちら様？」

無表情に告げる少女の声色はやけに平坦で、九条のイメージと寸

分違わぬものだった。

色素の薄い髪は肩口で乱雑に切り揃えられ、その顔は非常に整ってはいるが中性的。寝起きなのか目は虚ろで服装は上下スウェットのような物を着ていた。

「魔術特区から派遣された九条だけど、暇かい？」

「暇じゃなかったらどうするの？」

見知らぬ異性の前で寝巻姿を晒すことには抵抗がないらしく、少女は欠伸を欠きながら取りあえず入れば、と扉を大きく開いて九条を招き入れる。

軽い運動の後で喉が渴いていた九条は、お茶をくれるならと軽口を叩き躊躇いなくコンテナの中に踏み入れる。

「取りあえず確認。雲母 臯月で間違いない？」

適当に座って、と言ってコップにミネラルウォーターを注ぐ少女の言葉に甘え、閑散とした室内の床に腰を下ろしながらぶつきらぼうに尋ねる。

「俺は確かに雲母だけど、分かって来てたんじゃないの？」

少女、雲母はどうぞと並々に水を注がれたコップを九条に差出し、不思議そうに言う。

「探査用“魔術”は得意じゃないんだ。この辺に居ることは各務…君の学校の生徒に聞いたから、辺り一帯に人間を対象に掛けた。で、反応は君くらい」

「へえ、お兄さん結構万能だね。俺とは大違い」

雲母は九条の向かいに座り、自分用に準備したコップに口を着ける。

「それで、どうするんだい？」

「どうもこうも、行くしかないなら行くさ。特区と戦争するのは面倒だし」

顔に浮かべたシニカルな笑みは、確かに魔術師然として自然だった。違いと言えば、魔術師の多くが持つ圧倒的な知識欲が感じられないだけ。それだけが九条は不自然に思えた。

「君は、自分が知らないことを知りたいとは思わないのか？」

行ってみなければ分からないこともある。九条が未知を期待して特区に行くことを決め、そして落胆したように。そんな期待すら、彼女から感じることは出来ない。

「別に俺が知りたい事はもうないよ。だから特区行きも面倒なだけだし、ここに居るだけで十分だった」

雲母がさもつまらなそうに呟く。

「お兄さん、なんでこの街が閉鎖都市とされ、特区なんてものが成り立っているか知ってる？」

「一般的には、各文明の飛躍的な発達を謳ってるね」

飲みかけのコップを側にあつたテーブルに置き、九条は立ち上がる。魔術なんてものを使わなくとも、外の様子くらい窺う術はあつた。

「そう、それも一つの理由。けどね、エリア警備とかそんな境界を甘んじて受け入れる必要は、まったくない。本当に文明の発達が目的なら、欲しい技術は力ずくでも奪い取ればいい。それだけの力が、各特区には存在する」

九条が置いたコップを手に取り、雲母も同じように立ち上がった。それをキッチンらしき場所に片づけた。そして人目憚らず、寝巻のスウェットを脱ぎ捨て普段着に着替えを始める。黒のハイネットクに草臥れたジーンズ。ただでさえ中性的だったものが、それによって余計男っぽく見えた。

「俺はね、魔術師だから特区に呼ばれた訳じゃない」

着替えを終えた雲母は部屋の片隅に置かれた大きめのシヨルダーバックをよいしょ、と持ち上げこのコンテナハウスの扉を開く。

先に出て、早く来いよ、と促す彼女の言葉に従い、九条もゆつくりと曇天に陰つた外界へと扉をくぐる。本当なら、もう少しこの場所に居たかった。機甲兵師の目的は自分らではないにしろ、可能性があるならば避けるに越したことはない。このままやり過ごすことも可能だからこそ、準備しようと思ち上がったというのに彼女が

躊躇いなく外に出たせいでそれも叶わない。

このまま自分だけ逃げられることはできる。それでも、九条は抗えなかった。自分の知らないことを彼女は知っている。何故かは分からない。この一般区画に住む普通の少女がそんなことを知る理由も理解しがたい。それだというのに、この知識欲には勝てない。自分は、この欲求に勝つことは出来ない。

雲母は、初めて笑った。知りたい事はないと言い切った彼女が、微かに微笑んだ。

「この街はね、俺の為に閉鎖されたんだよ」

それが答え。この街の目的は各特区の目的と同義。だからこそ特区は、曖昧で情弱で、自らを縛ることさえ叶わないような境界を受け入れている。

「最初に気付いたのが魔術特区だった。そして遅れて気付いた科学特区が、能力特区に気付かれないように裏で動き始めた。まあそのついでにと欲張ったおかげで、敵さんの戦力は減っちゃったみたいだけ」

雲母はたった今着いたとばかりに立ち尽くし、予想外に現れた目標に啞然とする機甲兵師を指差す。

「そんじゃま、しつかり俺を護ってくれよ。お兄さん」

それから機甲兵師の動きは迅速だった。雲母の言葉に我を取り戻した半機械の男は滑らかな動きで右手を正面に突き出し、内蔵された遠距離武器から何かを射出する。

それに対し、九条は動かなかった。あまりに突然の事態に動転しているという訳でもなく、ただただ立ち尽くし、相手を見るだけ。それだけで、九条には十分だった。

高速で飛来する何かを狙い撃つかのように、空から一滴の滴が零れる。先程まで止んでいた雨がまた降り出したのだろう、と男は思った。そう、ただ、雨水が落ちただけ。それだけで、九条たちを狙った何かは撃ち落とされ、それに続くように降り注いだ幾つかの水滴によって男は沈んだ。

何が起きたのか、全く理解できない。機甲兵師はけたたましく鳴り響く危険信号によって初めて自分の状態を理解し、啞然とした。

「雨が地面に落ちる、という結果が存在する。その式は物理的なモノや魔術的なモノで形作られる。たとえば、上空にある一滴の滴が何秒掛けてどのくらいの速度で地面に到達するか、とか。僕はそんな面倒な途中式を全て放棄している。答えと問いが分かっているのだから、式は単純な公式だけで事足りる。」

そして最初と最後があれば、必ずその過程が存在するのも事実。その結果、上空にあった滴は地面へと瞬間的に移動し、その過程が滴は高速に降り注ぎ物体を貫いた、ということになる。」

そう、ただそれだけのこと。それだけのことを行う究極的な術が、九条の創り出した魔術体系だった。だから必要以上に面倒で複雑で入り組んだ世に言う魔術というものが苦手だったし、それを組み上げるのも嫌いだった。それこそ、自身の地位向上を諦めることになったとしても。九条は倒れ伏した機甲兵師にゆっくりと近付き、生死を確かめる。すると流石に科学特区の兵器、存外丈夫にできているらしく、男は虫の息ながらまだ生きていた。

取りあえずとポケットから小さなカードを取り出し、男の装甲の隙間に差しこんで魔力を流し込む。そうして発現した炎で発信機などの組み込まれているだろう部分を焼き切り、仕事は終了ですと雲母を振り返った。

「危険信号のおかげで発信機とかの場所は確実に破壊できた。これで当面は君の居場所は割れないだろうけど、どうする?」

我ながらふざけた発言だな、と九条は密かに自嘲した。この内容は、自分が彼女を庇うという前提での事。そして自分は、もうそうすることを決めてしまっている。

「お兄さんはどうするんだい?」

「僕は、知りたいことが出来たからもう暫くここにいるよ。“君を捜す”為だね」

それじゃあ縁があれば、と雲母に背を向け、恐らく機甲兵師の男

が開けた際に壊れたのだろう、永遠に閉まることの無くなった屋上への出入り口を通り抜ける。またあの階段を下りるのか、とうんざりとした気分だったが、今はそれよりも嬉しさの方が大きかった。

雲母が言ったこと全てが真実だとは到底思えない。それでも、閉鎖都市の目的と各特区の目的。そしてそれを果たすために今なお徹底的に守られているような境界を唯一、それもすべてを超え、最終的にこの一般区画で姿を消したエイズ博士。

昔は自分がとても稀有な存在だと思い込んでいた。そしてその事実が間違いだと知った時も、知識欲は際限なく湧き出た。ならば、自分はそれを突き詰めよう。たとえありきたりな終局を迎えようとも、それだけが自分をこの世界に繋ぎ止めているのだから。

だから、九条は自分の隣に追いつき並んだ少女を拒みもしなかった。まだ、彼女にも知りたいことは残っているのだから。

フラグメント・オーヴァー（後書き）

この作品を気に入ってくれた方、お気に入り登録などとして頂けると励みになります。よろしくお願いします。

第一章 殺人衝動Ⅱ サツリクコウドウ 1

時刻は夜半。空を見上げて月も無く、人工的な光だけが辺りを照らしている。

今の時代に珍しく、野良の犬猫が闊歩する旧市街の中でも特に奥まった、もはや遺跡と化した建物の乱立する閉鎖地区。

閉鎖の理由は公になってはいないが、一般区画の住人の間では共通してある噂が根付いている。

曰く、月の隠れた闇の世界。深夜になるとそこは、異形の悪魔が立ち込める地獄となる

根も葉もない噂だし、第一遺跡のような閉鎖地区であろうとも電気は通っている。日が暮ればまだ生きている街灯は点滅しながらも周辺を照らす為、完全な闇の世界など存在しない。

ようするに、住民の間でこそさも真実のように扱われている噂ではあるが、その実それを信じている輩はほとんどいない。居るとすればそれは、真実その目で悪魔とやらを目にした奴くらいだろう。

そして、今現在。数少ない正常に稼働している街灯の下で、緊張感なく呆けた面で待ち惚けを喰らっている各務 恭哉は後者。嘘偽りなく確固たる自我を持って思考と判断が正常に働く環境下で“悪魔”と呼ばれる存在を目撃した、根も葉もない噂の体現者であった。

第一章 殺人衝動Ⅱ サツリクコウドウ

この十七年間各務が生きてきた中で自覚する数少ない自己認識の一つ。彼は病的なまでに時間にルーズだった。

遅刻しないことは殆んどないし、むしろ約束事なんかは時間どころかそれ自体忘れてしまう事も多々ある。

唯一の例外としては学校の登校時間には遅れない。けれどそれだつて、日も出ぬ内から鞆片手にコンビニで雑誌の立ち読み。そろそろ朝だなあと思ったら誰よりも早く、仕事に向かう大人の姿も見えぬ時間から学校に向かう。

朝早くからの出勤故に寝不足で伏し目がちな自称永遠の二十三歳（なんとも微妙なサバ読みである）の事務員さんとは既に顔見知りの中で、嫌そうな顔で校舎の鍵を放り渡す様ももう愛嬌と感ぜてしまつ程。

そんな各務が待ち合わせ時刻の三十分後に到着したこの街灯下で待ち惚けてもう一時間が経った。

最初は珍しく自分の方が先に着いたのか、などと地味に喜んでいが、十分二十分と時間が経過するに連れて喜びは疑心が変わる。

もしかして、約束は今日ではなかったのではないだろうか。十四日の深夜にとは言っていたが、零時を過ぎればもう十五日な訳だし、もしかしたらあいつは十三日の深夜と言いたかったのかもしれない。確かに悪魔的な雰囲気では十三日のほうがそれっぽい。だがしかし、それでは合流する頃には十四日な訳で。

などとなない知恵絞って考えていると、気付けば三十分どころかもう一時間である。自分が遅れた分合わせ、計一時間半。どう考えても、すっぱかしを喰らったか、日付を間違えたか。

散々根気良く待ち続けた各務ではあったが、流石にこのまま朝まで待って「なんで昨日来なかつたんだよ！ 待ってる間に夜が明けちまつたぜ」なんて色々痛い奴になるほど間抜けではない。

最後にもう一度携帯を開き、現在時刻を確認して割り切る。

（こんだだけ待てば、文句も言われないだろ）

とんだ肩すかしを喰らったと道端の小石に八つ当たりをして、帰路に着くことにした。

この閉鎖地区に通うようになってもう一ヶ月が経つ。いくら道が暗くとも迷うことはなく、ゆっくりとした歩調ではあるものの最短距離で境界壁 壁と言っても造りはそのまんま塀だが に向か

って歩き続ける。

それでも、ここから家までは一時間近く歩かなければならないし、運が悪ければ仕事熱心な警備の方々と夜を明かすことにもなりかねない。幸い警備の範囲は境界壁周辺と非常に狭いので、よっぽどの下手を打たなければ捕まることもない。

閉鎖目的が噂通りの悪魔だったとしたら、嚴重な警備の施されている区画境界壁の監視対象である特区の連中よりはマシと思われるのかもしれない。

各務としてはその悪魔とやらを目撃している手前、特区の連中よりこつちのほうがヤバイと声を大にして言っただけだが、比べるべき相手を知っているのは九条という陰険魔術師と運よく撃退したサイボーグだけ。

しかも九条が魔術を使う場面を見てないので、結局のところ悪魔 vs サイボーグという図式。字面的にもよっぽど悪魔の方が危険そうである。もっともサイボーグに自爆覚悟の爆弾やらなんやらが搭載されていない場合に限るが。

そんな感じに脳内での危険度ダービーを繰り広げていた各務であったが、ふとどこかで見たことがあるような人影が視界に映り、反射的に足を止める。

「なんだよ、待ち合わせ場所はそっちかよ」

どうやら日時時間は間違いではなかったらしく、落ち合う場所が違っていたようだった。

境界壁に向かっていた足を右に方向転換し、待ち人が経つ街灯下に変える。

遠目から見ても待ち人（もはや待たされ人）は機嫌が悪そうで、周囲には八つ当たりの対象となった廃墟の残骸が散らばっている。小石の自分とはスケールが違う。

「悪い、場所間違えてたみたいだ」

揚々と片手を振りながら苦虫を噛み潰したかのような表情でこちらを睨み付ける人物に近付き、頭を下げる。

数少ない正常に稼働している街灯その二。暗闇の中に輝く銀光は見間違えようもなく、その白磁のような肌は汚しようもなく、その紅の瞳は躊躇なく、自分へと向けられている。

「きよーちゃん、確かに私は心優しい女神の化身のような乙女で、しかも君にゾッコンラブだよ。だがな、流石にこればかりは我慢の限界だ、容赦のしようがない。怒りのあまり思わずサクツときよーちゃんを輪切りにしてしまえようだよ」

「仕方ないだろ、俺はてつきり奥の方だと思ってたんだ。それに、時間はちゃんと守ったんだぞ？」

実を言わなくとも遅れていた訳だが、ここで敢えて怒りを買う程マゾではない。どうせばれないのなら、こついつた嘘も役には立つのだ。

「む、それは珍しい。きよーちゃんは呆れるくらい時間にはルーズだからなあ」

「たまにはそういうこともあるさ。それより、今日はどういったご用件で？」

そう、別にこんな深夜遅くから逢引するためにわざわざ閉鎖地区まで繰り出した訳ではない。恐怖の殺人鬼再来

今ここ閉鎖地区の悪魔伝説以上に巷を騒がせている、世紀の異端者。

最高の利便性、絶対の快適と安全を謳うこの一般区画でのおぞましい事件は、平和ボケした連中を賑わせるには少々刺激の強すぎるスパイスだった。

僅か一ヶ月で二桁に上る被害数。どう考えても以上過ぎた。飛び出た杭は打たれる、というにも些か飛び出すぎて打つ輩がいらないというのが現状である。

基本的に区画境界線以外の世情には我関せずのエリア警備が重い腰を上げ、特区からの増援も少なからず出ている。魔術師にサイボーグ、超能力者。これだけのフルコースを見事に“平らげて”いるのだから、そりゃあ打つ方も諦めざるを得ない。

そんな殺人鬼に奇しくも熱を上げているのが、同類こと殺人鬼、各務 恭哉と住所年齢不詳、通称銀系の乙女、シルヴィの二人組だった。

シルヴィの話は至極簡単なものだった。殺人鬼はこの閉鎖地区を根城としていて、六年前の事件と何らかの関係を持っている、と。

確かに情報誌や噂で得たその殺人鬼の情報は六年前のものと酷似している。それならば、駄目元で当たってみようと動き出した各務に協力を申し出たのがシルヴィだった。

信頼出来るような出会い方ではなかったが、彼女が自分よりもその辺りの話に詳しいのは確か。本人ははぐらかしてはいるが、科学特区の精鋭に追われているらしく何かしら特区との密接な関係も予期させる。

そもそも他に当てもないのだ。九条には逃げられ、エイズ博士とやらの消息も掴める訳もない。選択肢も糞もない。各務はこの提案を受けるしかなかった。

結果こういった感じに情報収集をシルヴィが担当し、いざという時の肉体労働を各務と分担して日夜暗躍している。彼女が何のため協力してくれているのかは分からないが、きっとギブアンドテイクな関係だろうというのが現状の認識だ。

そうして今日も今日とて足気無く閉鎖地区に通うシルヴィとはすれ違いの生活で、何か進展もしくは用件がある時はこうやって呼び出される。呼び出されるとは言っても彼女は極度の機械音痴らしく携帯さえまともに扱えないのもっぱら書置きという手段を取っているのだが。

初めは今夜こそはと意気込んで自宅を出ていた各務ではあったが、一ヶ月が経過しても大して得るものはなし。毎日のように通うシルヴィがそれなのだから、最近はその情報自体嘘か真か怪しいところ

である。

ちなみに言わせてもらおうと、殺人鬼の犯行は現在進行形で絶賛量産中と言ったところだろうか。その言葉通り、量産である。死体が積もるわ積もるわ、ペースアップも程々にして欲しい。どっかのみつちくも社会にしがみ付いている殺人鬼とは大違いである。

「なんか、もう街中ブラブラしてる方が遭遇率高いんじゃないか？」
結局何の収穫も得られず、珍しく二人で帰路に着くことになったことに違和感を覚えながら、各務は一人ゴチる。

「ん、私はそれでも良いけど、きよーちゃんは街中で相手と殺し合っつて大丈夫か？」

「却下。そもそも、俺がああいう輩と殺り合えるかどうかも疑問ですよ。普通の高校生やってたんだから」

先月運よく撃退したサイボーグだって、その通り運よくなのだ。今になって考えると勝てた事が異常である。とてもじゃないが、もう一度やって倒せと言われても無理な話である。

「それに関しては恐らく大丈夫。君は本質からして殺人鬼だ。文字通り人を殺す鬼、反転すればそれが人ならなんの滞りもなく本質を完遂するだろう。もっとも、何事にも例外はある訳だが」

「色々と気になる言葉はあるんだが、敢えて一つだけ聞こう。例外とは？」

「簡単なことだ。例えるのならきよーちゃんの言う九条という男……私の知る情報が正しければ魔術特区でも五指に入る魔術師なんだが。あの男が本気でやれば、半径数キロは軽く消し飛ばせるだろう。きよーちゃんは、僅か数瞬で完了する魔術が発動するまでに数キロ離れた範囲外まで逃げ出せる？」

「それは確かに無理な話だ。あいつとの距離が肉薄してるなら話は別だけど、きつとその前に消されること間違いなしだな。それが本当なら」

実際に九条に会ったことのある各務からすればとてもそういう風には見えなかったが、能ある鷹は爪を隠すということだろう。今度

会ったら気を付けようとしっかり記憶する。

「もつとも件の相手はそういった類の輩ではないだろうから安心しろ。あれは殺戮者だ。範囲があまりにも広がりすぎて、対象すら定まっていない。人を殺し、獣を殺し、物を殺す。位置付けるとしたら殺人鬼よりは上かもしれないが、実力としては拡散した分きちんと薄くなっているだろう」

「殺戮者、ね。言葉的には殺人鬼なんかよりよっぽど恐ろしいけどな。俺としては殺人鬼も殺戮者も同じくらい怖いんだけど」

「そう言うな、実際そいつの前に立てば恐怖もなくなるさ。そんなことより気を配るべきは墮とし子……俗に言う悪魔の存在だ。十中八九両者に関連性があるのは疑いようもない。むしろそうでないと私が割いた時間の見返りがきょーちゃんの愛情だけになってしまう」
「やっ」と遠目に見えてきた街の明かりに目を細めていた各務が、思わずぞつとした表情で隣を歩く少女の顔を見る。

そう、少女なのだ。しかも絶世の美少女。それが愛情とかなんとか述べて、相手は高校生。否定しようがなく犯罪チツクな感じである。それだけ、シルヴィは童顔というか、幼く見えた。

十四歳とか本人の口から語らればああそうなんだと言った程度だが、彼女は年齢不詳。語られなければ小学生の少女を手籠にする下劣な高校生の構図に見えること間違いなし。それならば殺人鬼として高校生Aの名を与えられた方がよっぽどマシである。

以前恐る恐る聞いたところ、少なくとも犯罪チツクな線はクリアしているようなので安心したが、他人から見ればそんなこと知ったこっちゃないのだ。街中でこんな台詞を吐かれるのは困るので、その類の言葉には敏感になっているのだった。

「その言い草からすると、悪魔の正体に関してはなにか知ってるみたいだな」

子供が言う事に一々むきになっても仕方ないので、自宅や閉鎖地区では敢えて聞かなかったことにするよう心がけている各務。何事もなかったかのように会話を続ける。

「まあな、私の目的はむしろこちら。その堕とし子を生みだす輩を処理するのが役目だ。当然、正体も知っている」

「へえ、ということとは閉鎖地区の悪魔を生み出しているのが例の殺戮者ってことか。それで、正体とやらは教えてくれるのか？」

「そのうち、な。気にすることはない、きよーちゃんになら何の滞りもなく殺人鬼を完了できるだろうさ。自覚していないようだけど、結構レアな存在なんだよ。きよーちゃんは」

そう言ってシルヴィは立ち止まり、それに合わせて各務も足を止める。そっと、繊細なる白磁の指先が伸ばされ、各務の腰に触れる。服の上からなぞられる、鋭利な狂気。触れば容易く斬れてしまいうようなその肌は躊躇うことなく刃をなぞり、光悦な表情で各務を見る。

本当に、殺したくなる。時折見せるこの少女の仕草は、狡猾なまでに各務の欲求を刺激し、反転させようと囁き掛ける。

身体の末端に刃物を突き刺し、その伏し目がちな瞳を見開かせ、そのまま徐々に中心へと向かってくる狂気の痛みと恐怖にその白い喉を躍動させ、小鳥のような声を鳴かせたくなる。

そうして、そのまま。血濡れた刃を心臓へと突き立て、すべては完了する。それが出来れば、もう、すべてを完了できる。そんな幻視。

まだ完了させる訳にはいかない。目的を果たすまでは。幸い街はすぐそこだ。このまま喧騒な繁華街の人混みに心を誤魔化し、大人しく家に帰るとしよう。

いつまでもうっとりとしたこちらを見ているシルヴィの前で両手を打ち、我に返った彼女を連れて各務は殺戮者の待つ街の中へと帰るところにした。空はもう、白じんでいる。

第一章 殺人衝動「サツリクコウドウ」 2

旧市街が旧市街とされる理由は二つある。一つは機密事項扱いで一般人には知らせられてはならず、もう一つも非常に言葉を濁した物言いで公表されている為、信用度はあまり高くない。

青少年たち特有のストレス等の捌け口。要するに、旧市街とは一般に言う不良たちへ解放されている街ということである。

理由として、一般区画は快適安全を謳っている為、街中での青少年による軽犯罪に対してもかなり厳しく取り締まる。普通なら注意程度で済むような店前での屯ですら営業妨害として連行されかねない。

そしてそうした行きすぎた抑圧というものは決して良い影響ばかりを与える訳ではない。結論から言うと、閉鎖都市設立当初の一般区画は軽重入り乱れた犯罪者の巣窟に近かった。

理不尽にも閉じ込められ、遊ぶことすらままならない。少しでも“いけない事”をすれば即刻警備署行き。そんな行き場を失ったエンルギーは当然、時を待たずして暴発する。

そういつた教訓から作られた旧市街という一個の都市は、無法街とは言わずともそれに近い環境と化しているのが現状だ。もっとも政府側としてはそれは予定通りであり、何の危惧もない。手の付けられない輩はそうやって、制限された自由を餌に閉じ込めておくのが最善。

とはいえ、表だってそのような発言をする訳にもいかず、かといって住民もそれに対してこれと言った不満もない。その極めて投げやりな両者の認識が、この歪で不安定な環境を暗黙の了解で許容しているのだった。

要するに旧市街は悪の巣窟。善人は誰一人として近寄らず、その境界の中で築かれた幾つものコミュニティは病的なまでに排他的。その環境は、殺戮者と評された男にとって最適過ぎるものだった。

悪の巢窟内に抱え込まれるかのように存在する、悪魔の巢窟。今となつては旧市街の屈強な連中でさえ近寄らないその地区は、正真正銘陸の孤島と化していた。

男は日課の補給を終えた自分を、帰りの道中ずっと睨み続ける礼儀知らずな奴らの視線を何食わぬ顔で受け流す。慣れたものではあつたが、徹底的な拒絶もここまで行つてしまつたと外れ者である自分にでさえ気味悪く思えてしまう。

補給の際ついでに取つて来た財布など金目の物を適当な場所に投げ捨て、今現在の住処である閉鎖地区最奥ホームセンター跡地を目指す。通行料の代わり、と言つては少々額が高かつたが、自分には必要のないものである。こんなもので手懐けられるならお安いものだった。

男は辺りに人気がないことを確認してから境界壁を垂直飛びで乗り越え、旧市街から閉鎖地区へと移動する。ここまでくれば悪いお兄さん方に文句を言われる事もない。ここは、彼らのテリトリーの外である。

いかに悪魔の巢窟で笑つて過ごせるような能天気とはいへ、あの圧倒的なまでの敵意の数々は居心地の良いものではない。

そんな鬱憤から解放され、身も心も自由になつた気分を味わいながら男は鼻歌を口ずさみながら、視認するのも難しい暗闇の道を楽しそうに歩く。この辺りは生きてる街灯は皆無だ。不便ではあるが自分のような人間には相応しいだろう、と男は好んでその道を通ることにしていた。

崩れかけの壁を先程と同じように垂直飛びで避けつつ、最短距離で自らの住処へと向かう。偶に“高い障害物”もあつたが、それも男の前ではさして障害にはならない。

鼻歌は止めて口笛に切り替えたものの、相変わらず気楽そうに風を切り、計十分弱の時間を消費して高いビルディングの正面玄関の前に立つ。ここから先は、悪魔のテリトリー。口笛も止め、とうと

う音を発する事を止めた男は、巨大なガラス戸を押し開けた。

鼻に着く異臭。一階は戦場だった。異形の悪魔へと姿を変えた肉塊。一般人なら卒倒モノのシュールな光景である。

疲れているというのに。まるで悪魔たちは構って欲しい子供のよう
に男へと群がり、爪を突き立てる。成す術もない。研ぎ澄まされ
た刃はいとも容易く身体中を切り裂き、臓腑を抉り、血液をかき混
ぜる。痛む暇もない。

あらかた満足したのか、ほとんどの悪魔は凄惨な現場を後にして
何処かへと姿を消していく。残ったのは、四散した残骸の数々。ど
うしようもなく、殺し尽くされていた。

「本当に、いつ見ても容赦がないよね」

その世にもおぞましい光景を見て、男は人ごとのように口を尖ら
せる。

「そういう仕草は、私のような人間がやってこそ効果を発揮するの
だ。君のような男にやられても、気色が悪い」

どこからか内容こそキツイものの、柔らかい女性の声が発せられ
ホールの中に響く。男は周囲を見渡すがその姿は見えず、それでい
て向こうはどうやらこちらが見えているらしいので、下手な行動は
出来ない。

いつから居たのかは分からないが、どう考えても心優しく援護に
駆けつけてくれたお仲間とも思えない。そんな輩はとうの昔に出来
る限りの残虐な手口で殺し尽くしてやった。

「安心しろ、今日のところは敵ではない。むしろ味方だ」

「味方あ？ なら、殺さなくっちゃいけないんだけど、どうしよっ
か？」

「む、ならば中立、ということにしよう。とにかく、君に危害を加
える気は毛頭ないし、加えられるだけの力もないことだけは理解し
て欲しい」

正直、姿も見せないで味方だか中立だか言われてもまったくもっ
て納得いかないし、もしかしたら声は女でその実滅茶苦茶強そうな

巨漢の可能性もある。かといつて未だ燻り続けている悪魔の連中を下手に刺激するのはいただけない。いらんとばかりを受けたくはないのだ。

「いいぜい、取りあえず話には付き合つてやる。本当ならこんな所、さつさとおさらばして上に行きたいところだが、まあ連中も一人殺したばかりだし襲つては来ないかも？」

「その疑問形は大いに気になるが、まあ良いだろう。用件は至極簡単、忠告だ。早いうちに此処を出た方がいいぞ、狙撃主が来ている」
女の狙撃主という言葉に、男が僅かに反応する。

狙撃主

自分たちのような人間を肅清する為に訪れる、ノアの刺客。本人は手を汚さず、離れた場所から顛末を見続けるその人物に与えられた蔑称。

ノア、という存在に関して男はそれ程詳しい訳ではないが、まるで無関係ということでもない。故に本来各特区の上層部しか知らないようなそいつらの名前に対して警戒するだけの認識は備えていたし、上手く立ちまわっているつもりだった。

やはり、悪魔というのはやりすぎだったのかも知れない。

男は不機嫌そうに舌を打ち、破れた上着のポケットから煙草を取り出し口に啣える。精神安定剤のようなものではあったが、生憎火種を切らしている。煙草自体にも先の惨事で血が染みていたので、啣えるところで意味はない。まさしくないよりはマシと言ったものだった。

「そして今回の魔弾、なかなかの逸品だ。下手をすれば君でも喰われかねないぞ？ 私としてはもう暫く、世間には騒いでいて欲しいのでね……その為の忠告だ」

「そいつは御苦労さま。だがいかに魔弾と言えど、今の俺は止められねえよ。五年掛かったが、体調は万全だ」

もう話す気はないのか、男は足元に四散した肉塊を蹴飛ばしながら上階へと続く階段へと歩き始める。

それを死角から眺めていた女はふんと鼻を鳴らし、気配を読まれぬようにそつとビルディングを後にする。出入り口は正面と裏にしかなかったが、女にとって新しい開口部を生み出すことなど造作もない事だった。

気配こそ感じなかったが、恐らくこの場を去ったことを感じ取った男は重い足取りで自分が寝食を主にしている三階の寝具コーナーを指し、階段を上る。

途中、踊り場の窓から辛うじて見える弓のような細い月を見上げ、溜息を吐く。どうにも不吉な夜である。

雲に隠れた月を背に男は姿を消し、その場には血に染まった煙草の吸殻だけが残された。

なんとも不吉な、うだるような暑さを持った梅雨の月、十四日の夜の事である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4540j/>

ノア=クラスター

2010年10月8日16時12分発行